

## 恵みの契約の共同体的位相：カール・バルト『教会教義学』「和解論」を中心として

著者	阿久戸 義愛
内容記述	筑波大学博士（文学）学位論文・平成23年3月25日 授与（甲第5589号）
発行年	2011
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/113055">http://hdl.handle.net/2241/113055</a>

氏 名 (本籍)	阿久戸 義 愛 (東 京 都)
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 5589 号
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	恵みの契約の共同体的位相 ーカール・バルト『教会教義学』『和解論』を中心としてー

主	査	筑波大学教授	博士 (文学)	桑 原 直 己
副	査	筑波大学教授	文学博士	伊 藤 益
副	査	筑波大学准教授	文学博士	保 呂 篤 彦
副	査	西南学院大学教授	文学博士	片 山 寛

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、カール・バルトの『教会教義学』『和解論』における人間論、特にキリスト教的共同体論、キリスト教倫理学の可能性についてバルトが示唆するところの解明を主要目的としている。具体的には、初期の『ローマ書講解』では「時間と永遠の質的差異」を強調していたバルトが、後の『教会教義学』に至って歴史的具体的問題、特に共同体の基礎付けといった課題に取り組むための基盤をどこに求めていったのかという点を、「契約」という概念を中心に考察している。

『ローマ書講解』における初期バルト神学の特徴は、近代神学に反論するかたちで「キリスト教本来の神」を再発見しようとした点にある (第一章)。バルト思想の基本を形成する「無限の質的差異」、「罪」、「終末論」といった概念は人間の限界を明確にし、そこに働く神からの働きかけにより、人間がその限界内にありながらもそのまま変えられていくという弁証法的な論理を示している。しかし初期バルト思想は近代神学に反論する立場から神中心主義を強調するあまり、人間が神の前にどのような存在であり得るのか、あるいは歴史の中で具体的に何かを為し得るのか、といった問いを課題として残すこととなった。筆者によればその課題は『教会教義学』『和解論』に至る過程で克服されていく (第二章)。初期バルト思想は、キルケゴールの影響のもと極端に「個人主義」的であると批判されるのが常であったが、「和解論」では信仰者の実存のみを重視する傾向が克服され、神と隣人とに結びついた共同体的な人間の存在理解へと思想が展開して行ったからである。

筆者は、人間の共同体を語る上での基礎となる人間論に関連して、バルトが否定的に捉えてきた人間の存在および自然本性が、「関係の類比」という概念を用いることによって一定の仕方で肯定しうるものとして捉え直されていることを示している (第三章)。「恵みに与る罪人」としての人間が神に結ばれる契約の関係においては、イエス・キリストの中にある人間の自然本性が肯定的に語られうる。このような神と人間との関係が「恵みの契約」の関係として示される (第四章)。この「契約」関係に基づいたバルトの「和解」概念を通じて、神から和解を与えられた人間存在が、「義人にして同時に罪人」という「新しい人間」として認識される。神との契約関係にあり、また神の契約相手として生きていくこの「新しい人間」は、神への「感

謝」ということを通じて、隣人と「共にある」関係を築いていくと言う（第五章）。バルトにとって、隣人との「まことの関係」を築いていくことが、「恵みの契約」を通じて求められている人間の倫理的主体性の型である。そしてこのような行為に向かっていくことが、人間を真に人間とするものとされる。

さらに、バルトにおいて「共同体」は、「キリスト教的愛の行為」によって築かれていくものであることが示されている。バルトの「キリスト教的愛」の思想は、神から和解を与えられた人間が、まず神が罪人である人間に対して神の愛を示すことによって、その神の愛に働かれて自ら愛する者となるというものである（第六章）。この「キリスト教的愛」は、神だけでなく隣人にも向かう。この愛の行為によって人はそれぞれの隣人に対して「恵みの契約の証人」としての「証し」において他者へと自己を贈与していく（第七章）。そのような「愛」と「証し」の行為により人間相互間に樹立される新しい交わりが「真の教会」としてのキリスト者共同体である（第八章）。「キリスト教的愛」の行為の相互性によって、「キリストに働かれた霊的な交わり」が築かれる。筆者は、以上のような形でバルト思想が共同体を意味づけたことにより、初期バルト思想における「個人主義的傾向」のもつ難点が克服されたことを明らかにしている。

最後に筆者は、人間が祈りの中で神へと呼びかけ、その呼びかけの中で自らの本来の姿を見て、キリスト教的愛の生活へと自らを方向付けることのうちに、バルトの倫理学が展開されていることを示している。筆者によれば、それは、近代神学からは見失われてきた「神と人間の関係」において人間の存在を捉えていく「キリスト教本来の人間論の宗教改革以来の復興」という意味をもつものであった。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

『教会教義学』におけるバルトが、初期バルト思想の難点とされる極度に個人主義的な性格を克服し、共同体および倫理学の可能性を切り開いていった経緯を、テキストの丹念な読みと検討とから粘り強く解明していった本論文の成果は高く評価される。ただし、バルト神学における「歴史性」の意味の解明などについて今後課題を残している点が審査委員から指摘されている。

論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。